<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>フロイト精神分析『第一局所論』における「無意識」概念の検討リクールのフロイト解釈における主体の検討のための予備考察</td>
</tr>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>後藤 悠帆</td>
</tr>
<tr>
<td>大学名</td>
<td>公立大学</td>
</tr>
<tr>
<td>期日</td>
<td>2016-11</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="https://doi.org/10.14989/225152">https://doi.org/10.14989/225152</a></td>
</tr>
<tr>
<td>データベース</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>テキストバージョン</td>
<td>publisher</td>
</tr>
</tbody>
</table>
Investigation of the concept of “unconscious” in S. Freud’s psychoanalysis of the first topography

-Preliminary consideration to investigate the subject in P. Ricœur’s interpretation of S. Freud

Yuho Goto
Kyoto University, Graduate School of Education, Specialize in Clinical Pedagogy, The second year of master’s course

English Abstract: The purpose of this paper is to clarify characteristics of the concept of “unconscious” in S. Freud’s psychoanalysis of the first topography, and also to consider preliminarily the relation between subject and consciousness and unconscious. First, this paper will investigate characteristics constituting the concept of unconscious. Second, I will examine metapsychological presentation, and reveal that Freud’s concept of unconscious is constituted not by means of descriptive but based on dynamic, topographical and economic aspects. The contents of unconscious is not only energy of instincts as “force” but also a ramified network of ideas as “meaning”, and the function of representative of instincts make possible to connect “force” and “meaning” in unconscious. Third, I will define the Freud’s unconscious as empirical and constitutive reality, by referring Paul Ricœur’s interpretation of Freud, and argue that immediate consciousness which is strongly criticized by Freud transform the hermeneutic consciousness by accepting Freud’s unconscious.

Keywords: Metapsychology, Unconscious, “force” and “meaning”, Psychic representative of instinct, Hermeneutic consciousness
1. 問題の所在

本稿は、S・フロイト（Sigmund Freud 1856-1939）が創始した精神分析における「無意識（Unbewußte）」概念の叙述的検討を通じて、第一局所論におけるフロイトの「無意識」概念の特徴を明らかにすることを課題とする。この作業を通じて、フロイト精神分析における主体と意識、および無意識との連関を検討するための予備考察を行いたい。

20 世紀を代表する思想家であるフロイトの現代思想への貢献を一言で要約するならば、「無意識の発見」であるといえる。彼が提出した無意識論は、19 世紀まで西洋思想の主流であった意識を中心とした人間観に多大な衝撃を与え、デカルト主義が存在と意識を同一視するのに対し、フロイトは、私たちに知覚される意識とは、私たちの心の一部に過ぎず、私たちの行動の多くは無意識から影響を受けていると述べたのである。

しかし、「無意識の発見」というフロイトの功績が非常に有名であるにもかかわらず、実際にフロイトによる「無意識」に関する次の問題を目にしてきたとき、私たちは「フロイトの無意識」の内実について理解していなかったことに気付かされる。たとえばフロイトは、無意識の核は、「その備給を改変させようとしている欲求代表（Triebrepräsentanz）から、すなわち欲望の構造から成立っている」（G.W., 10: 285／全、十四、二三四）と述べる。一見しただけでは私たちは、フロイトのこの一文が意味する無意識の構造や仕組み、その内実を理解することができないのでだ。

このようにフロイトの功績が広く知られているにもかかわらず、フロイトの無意識の内実が知られていない理由は、「無意識」という言葉の性格にも起因するものと思われる。たとえば現代において「無意識」という概念を用いて解釈を試みれば、「無意識」とは、「①意識を失っていること。②ある事をしながら、自分のしていることに気づかないこと。③個人は意識していないが日常の精神に影響を与えている心の深層。精神分析の用語」という三つの用法が示されている。

ここに示された上記第二の用法で私たちは、たとえば「無意識に鼻をこする」というように、その目的に識知されないまま、いかえれば、その目的に浮かせずに潜在的なまま実行された行動を指し示す。次章で確認するように、フロイトが「記述的」とよぶこの「無意識」の用語法は、潜在的な意識状態としての無意識を意味する。意識は私たちにとって余りにも「自己」なものであるため、意識とその質を同じくするこの「無意識」も、私たちにとって日々経験する「自己」なものである。そのため、私たちがフロイトの「無意識」をこのように捉えてしまうと、フロイト思想をその根本から捉え損なってしまうことになるのである。

それに対して国語辞典では精神分析の用語とされる第三の意味の「無意識」を前にしたときにも、私たちは大きな困難にぶつかる。無意識が私たちに意識されるという性格をもつならば、その無意識の構造を私たちはどのように推測することができるのか。仮にある構造や働きをもつ無意識が推測されたとして、その場合、その無意識が実在するという証明は、何によってどのようになされるのか。いわゆる精神分析学派とよばれる思潮においても、たとえば創始者フロイトとその弟子ユング（C. G. Jung 1875-1961）とのあいだでは無意識の構造をめぐり解析の相違が生じ、それぞれの理論が分かれたのはよく知られている。

---

1 新村出編、『広辞苑 第五版』、岩波書店、一九九八
また歴史的な文脈に目を向けた時、近現代において、フロイト精神分析をはじめとした西洋の知の受容とともに私たちの前に現れた「無意識」もしくは「潜在意識」は、その身に様々な意味を付与されて実に問題含みの働きをなしてきているのである。たとえばフロイト思想を日本で最初期に受容し紹介した中村古峯（1881-1952）によって、「潜在意識」は「一見しかではわからない不思議の異常のありかとして位置づけられ」、他者を「異常者」として屈いめるさいの論拠として機能した。それに対して、古峯が大々的な批判活動を展開した、近代日本の代表的な新宗教である本大教は、「無意識」を霊的なものに顕現する通行路であるとしてその存在を称揚したのである。そしてこのような「無意識」をめぐる意味の闘争は、とても古めかしい議論でも全くなく、現代においても同様に「無意識」はその当人が自覚していない潜在的な意図を暴露するための手法として、あるいは個人的宗教性を追求するためのモデルとして、その姿を私たちの前に示している。

しかしながら、フロイトが指摘する通り、夢や神経症、私たの犯行行為を考察の園内に含めたとき、人間の行為を意識の観点からのみ凝視し理解することに一定の限界があるのも事実であろう。そして当然のことながら、フロイトが自らの思想体系を構築した時に用いた一九世紀末から二〇世紀初頭におかっても、現代と同じく多くの論者によって、多種多様な「無

2 兵頭晶子、『精神病の日本近代』、青弓社、2008、p187
3 詳しくは兵頭（2008）を参照。
4 たとえば香山リカは、精神分析家のウィニコット（Donald Woods Winnicott 1896-1971）を援用しながら、守護霊やオーラなどとよばれる「超越世界」がいかにしてある者に心を消される者たちの心性を分析し、超越世界に属するされるそれらの象徴は「現代人にとっての新しい移行象徴」であるという解釈を提示する（2006:125）。
5 宗教学者の堀江宗正は、フロイトやユングの心理学は、「何らかの心理的動因——たとえば無意識など——を宗教的事象の背景に想定することによって、「宗教」についての説明力を心理学自身が持つようになったと指摘する（2009:17）。さらにそうした理論をもとに、「個人の宗教性をより成熟させ同時に、それに伴う危機的状況から個人を守る」（2009:244）ことを目的とした心理学者の理論を「心理学的宗教思想」とよび、その特徴を「宗教」を意識しつつも、「宗教」と距離をとり、「宗教」のある部分を批判的に継承する、ボスト『宗教』の思想運動としてまとめ（2009:23）。

「無意識」を想定することにより「宗教」を説明する心理学理論の特徴は、堀江によれば以下である。「まず、意識的自我を越えた力をもった実在がある。実在といっても、心理学的説明では、無意識的なもの、無意識、潜在意識として説明される。」「ある種の不可知論にもとづいて、神的実在をめぐる教義の真理主張そのものは問題とせず、それが心的実在として信条にとって重要であることを認め、さらにそれを無意識概念によって心理学的に説明をする。これが心理学的宗教理論の基本的特徴である」（2009:230）。
フロイト精神分析（第一局所論）における「無意識」概念の検討

意識」が語られてきたのである6。そうであるならば、なぜ「フロイトの無意識」が抜きんでて、それまでの意識中心の人間観を覆し、現代に到るまで長きにわたる思想的な影響力を持つ必然性があるかという問題を考察するに至ったのか。「フロイトの無意識の強大な影響力の一端を考察するためには、「無意識」概念を適切に解釈していく過程におけるフロイトの思想的系譜が有効であろう。それは同時に、現代の私たちが人間を理解し説明する際に「無意識」なるものを語るときに生じる問題点を浮き彫りにすることになるだろう。

以上の問題を考察するために、本稿はフロイトが1915年頃に執筆した「メタサイクロジー諸論」にとらわれる論考を中心に検討する。1900年に著述『夢解釈（Die Traumdeutung）』を世に問うフロイトは、自らの臨床経験の蓄積から、精神分析の体系の基礎づけにあたるような理論を構築しようと試みる。その内の一つの論文「無意識（Das Unbewusste）」(1915年)においてフロイトは、心の構造を意識・前意識・無意識という三つの系に分けて考察する、いわゆる「第一局所論」とよばれる思想を展開する。この第一局所論における「無意識」が、フロイトにより描出される過程を丁寧に辿りなおすことで、本稿はフロイトの無意識概念の特徴を明示的に示す。

その際に本稿は、解釈学および反省哲学の立場からフロイト精神分析を統合的に検討する。P・リクール（Paul Ricœur 1913-2005）のフロイト解釈を参照する8。リクールはフロイト精神分析の内に、意識と等価されるデカルト的な主体とは異なる、無意識をその存在に含めた主体のありかたを見出し、理性系の特別的考察する。そのため、フロイト思想における主体と意識、無意識との関係を明確化する。リクールを参照することで、第一局所論におけるフロイトの無意識概念の特徴を経済学における発動の〈代表〉（Repräsentanz）の機能に見出し、なおかつフロイトの無意識の実験性の有効性の範囲を画定することができるだろう。


7 自ら神経科医として医療行為に携わるにつれて知見から、無意識を含めた人間の心の働きや構造を理論化していきフロイトの思想は、思想形成の過程でその理論や概念の意味がえCS再構築されていくところに特徴がある。したがって、「無意識」や「意欲」といったフロイト理論における基礎的概念を、一義的に解釈することは非常に困難であり、むしろ不可能ささえいてよい。その中で「無意識」概念を検討するにあたって本稿がパーソコロジー諸論に焦点を当てた理由は、ここにおいてフロイトの中でも重要な構成である第一局所論がまとまって考察され、心の中の一つの系としての無意識が、フロイト精神学の独特的の語彙である行動論、局所論、経済学との関連のないで示唆されるからである。したがって本稿の「無意識」概念の検討は、大きく次の三つの限界をもつ。第一に、1900年の『夢解釈』第7章でフロイトが展開する、Ubw系の働きとマタサイクロジーとの関連の検討が不十分である。第二に、フロイトが1923年の『自我とエス（Das Ich und das Es）』において展開する、心を自我・エス・超自我という三つの分野に区別して考察する「第二局所論」との関連の検討が不十分である。1915年に提示されたフロイトのマタサイクロジーと、フロイト思想全体との関連を問うことは、今後の検討課題にしたい。

8 リクールのフロイト解釈について論じた研究としては久米博（1978）、池田清（1985）、樫井一成（2014）など参照。
う。さらにリクールのフロイト解釈において主のとなる、主体と意思および無意識との連関を検討するための準備としての考察を最後に試みたい。

論述の流れは以下の通りである。第一に、フロイトが「無意識」概念を構築する際の留意点を丁寧に主導化して考察した 1913 年の論文「精神分析における無意識概念についての若干の見解（Einige Bemerkungen über den Begriff des Unbewußten in der Psychoanalyse）」（以下論文「見解」）とその後の 2 年後の論文「無意識」を検討し、フロイトの「無意識」概念の構築過程に見出される特徴を整理する。第二には、メタサイコロジー諸篇の論文の検討を通して、第一局所論におけるフロイトの「無意識」概念がどのような辺りを構築されているのかを明らかにする。その際に本稿では、フロイト思想のなかでも特に難解な経済論を、リクールを参照して丁寧に検討する。第三に、リクールによるフロイトの無意識概念の批判的検討を参照し、フロイトの無意識を経験的および構成的な実態として捉え、無意識の意味の変容に伴いそれと密接な関連にあるフロイトの「意識」概念の変容を辿る。フロイトの無意識の受容に、直接意識は解釈学的意識に転換することになる。以上の考察を踏まえて、人間理解において「無意識」という視点を設定するに際しての注意点を提示したい。

2. 「無意識」概念の構築—論文「見解」と論文「無意識」

本章では、フロイトが「無意識」を主題に論じた論文「見解」（1913）と論文「無意識」（1915）を検討する。第一に、論文「見解」を検討しフロイトによる「無意識」という言葉の三つの用語法の区別とそれの意図を明らかにする。第二に、論文「見解」と論文「無意識」において、フロイトによる「無意識」概念の構築過程に見出される三つの特徴を浮き彫りにする。

2.1. 論文「見解」における「無意識」の三つの用語法

1913 年の論文「見解」は、二年後の論文「無意識」を準備するものと目されている重要な論考である。この論文におけるフロイトの意図は、大きく分けて二つある。それは第一に、私たちがなぜ「無意識」という主題を考察する必要があるのかという点について、読者に対して説得的に論証することである。第二に、その論証に際して生じる「無意識」という用語の多義的な用法を、三つに整理してまとめてあることである。この論文においてフロイトは、「無意識」という用語の使い方を「記述的」、「力動的的」、「システム的」用法の三つに区別する。以上のフロイトにより並行して論じられていく二つの点を本節では検討したい。

「無意識」という主題を考察するにあたって、フロイトはまずある単純な事実に注意を促す。ある表象が今私の意識に現前しなら、次の瞬間にそこから消えることができる。その表象は想起によって、新しい感覚的な知覚を必要とせずに意識に浮上することができる。この事実を理解するためには、この表象が意識のなかでは潜在的であったとしても、私たちの精神のなかには現前していたと仮定させるを得ない（G.W.: 8:430/全、十二、二七三）。

このような事実を記述するためにフロイトは、以下のような用語の区別を提示する。私たちの意識のうちに現前し、私たちによって知覚される表象を「意識的」とよび、これだけを「意識的」の表現の意味として認める。それに対して、潜在表象、いいかえれば記憶は、それが心の生活に含まれているとの仮定に根拠があるとすれば、「無意識的（unbewußt）」と
フロイト精神分析（第一局所論）における「無意識」概念の検討

いう表現によって特徴づける（G.W., 8: 431／全、十二、二七四）。この区分けの結果、私たちは「無意識的表象」という言葉によって、私たちには気付かれていないにもかかわらず、それ以外の徵候や証拠に基づいてその存在を認めることができる表象を指し示すことになる。これが「無意識」という用語の第二の「記述的」用語法である。

このような区分けは一見すると、ごくつまらない記述ないし分類の仕事として捉えられるだろう。しかしこフロイトは、「後催眠暗示」とよばれる事例がこうした用語上の区別の価値を高めてくれるという。

後催眠暗示とは催眠現象の一例である。催眠にかけられた被験者が、催眠をかけた医師によって催眠状態中に、ある行動をある時刻きっちりに実行するように依頼されたとする。その場合、被験者は覚醒後、催眠状態中に医師によってある行動を依頼されたということが想起されないにもかかわらず、先に取り決められた時間になると依頼された行動への衝動が精神におよぼし、その行動は意識的に実行されるのである。このような現象を記述するような場合、「行動の企画は与えられた瞬間に至って意識的になるまでは、その人物の精神のうちで潜在形態ないし無意識的に存在していたと述べる以外には、ほとんど不可能であろう」（G.W., 8: 432／全、十二、二七四 - 二七五）。

しかしこの実験は私たちに、さらなる啓示を与えるとフロイトはいう。私たちはその現象について、「純粋な記述的な把握から力動論的把握に移行するよう導かれるのである。催眠の最中に依頼された行動の観念は、特定の瞬間に単に意識の対象となったばかりでなく、実効的にもなった（強調——フロイト）」（G.W., 8: 432／全、十二、二七五）。つまり依頼された行動の観念は無意識的であったりにかかわらず、同時に被験者の意識に働きかけて行動を実行させる実効力を備えていたのである。

この実効的でかつ無意識的な表象に、なぜフロイトはこだわるのか。その理由は、まさにそれこそが、フロイトがそれまでに研究してきた神経症患者の心の生活に充満し、症状を発生させていたからである。たとえば『ヒステリー研究（Studien über Hysterie）』（1895）で取り上げられた有名なアンナ・O. 嫌の場合、彼女は自分でも理由が分からない、夏のひどく暑い時期にグラスから水を飲むことがなくなってしまった。しかし彼女は一度催眠下に置かれたとき、ある犬がグラスから水を飲んでいたことを目撃し、それに強い嫌悪感を感じていたことを思い出したのである。その出来事を語り尽くすことによって、彼女は再び、グラスから水を飲むことができるようになった（G.W., 1: 232-233／全、二、四〇 - 四一）。つまりここでの彼女が、強い嫌悪感をもたらした出来事を結びついた、グラスという無意識的表象に支配されていたのである。

以上の後催眠暗示の事例と神経症の分析から、フロイトは次の結論を引き出す。つまり、潜在的表象とはよばれるものは二種類ある。意識に参入することができる潜在的表象と、どんなに実効力が強かろうと、意識のうちに突入することができない潜在的表象である。これら二種類の表象を区別して指し示すためにフロイトは、第一の記述的な用語法と区別しながら、意識に参入可能な潜在的表象を新たに「前意識的（vorbewuβt）」と名づけ、その強度と実効性にもかかわらず、意識に参入することができない表象を「無意識的」と名づける
（G.W., 8: 434/全、十二、二七六・二七七）。これが「無意識」の第二の「力動論的」用語法である。

しかしながら前意識的な表象と無意識的な表象を区別することは、単なる分類の仕事に留まらず、私たちの心の活動における、機能論的で力動論的な関係についての意見を形成するように誘う。つまりここに、無意識的な表象が意識に突入するのを排除する生きた力が洞察されるのである。私たちの意識に「抵抗」として知覚されるその生きた力こそ、次章で詳細に検討する「圧制（Verdrängung）」の機制である。私たちの心の活動には、前意識的な表象に対しては何の妨害もしないが、無意識的表象に対しては、それを意識の内に引き受けることを反対する力がある。つまりここで「無意識」の力動論的な用語法には、無意識的表象の意識に対する実効力という意味と、それが意識の突入に際して圧制されているという意味での二つの力関係が含意されているのである。このようにフロイトは、無意識的記述的用語法のみでは、実際の精神症の事例をいい表すことができないことから、無意識の力動論的用語法を案出したのである。

さらにフロイトは、前意識的表象と無意識的表象を分け隔てる「圧制」とよばれる障壁の認識をこえて、精神分析は夢の分析を通して、意識的活動の法則とは大幅に異なった無意識的な心の活動の法則を明らかにしたと述べる（G.W., 8: 438/全、十二、二八〇）。この発見された無意識的な心の活動の法則に服した心のかなの一つの「系（System）」を指し示すために、フロイトは「無意識的なもの[das Unbewußt]の縮形である『Ubw』という文列表を提案」する。この用法こそが、「『無意識的』という表現が精神分析において獲得した第三の、そしてもっとも重要な意味である」（G.W., 8: 438-439/全、十二、二八一）。すなわち、「Ubw」という略記号によって心のかなの一つの系としての無意識を示すのが、「無意識」の第三の「システム的」用語法である。

以上のように論文「見解」においてフロイトは「無意識」をめぐる三つの用語法を展開したが、重要なのは「無意識」という用語が記述的用法からシステム的な用法に移行することにつれて、「無意識」が形容詞から名詞へと変化することである。「無意識」という用語は、形容詞としての状態を記述するための概念から、システム的用語法においては、心のなかで意識とは区別される一つの系を指し示すために名詞として扱われる。この「無意識」の意味の変遷がもたらした影響は第四章で改めて考察する。

2.2. フロイトによる「無意識」概念の構築過程に見出される三つの特徴

フロイトは論文「見解」において、自らの医師としての臨床経験で観察された事例を理解し説明するために、「無意識」という用語の使い方を丁寧に検討している印象を受ける。私たちはここで、フロイトが「無意識」という概念を構築する過程に見出されるいくつかの特徴に留意する必要がある。本節では二つの論文から見出された三つの特徴を取り上げて整理する。

フロイトは、この力動論的な意味での無意識的な表象は病理的な心理状態だけでなく、健康な人の心理においても働いていると考えた。その一つの事例は夢であり、もう一つの事例は、失言や記憶間違い、言い間違い、名前の忘れなどの錯話行為である。フロイトはそれぞれの主題を、1900年の『夢解釈』および1901年の『日常生活の精神病理学にむけて（Zur Psychopathologie des Alltagslebens）』において主題的に論じている。
フロイト精神分析（第一局所論）における「無意識」概念の検討

第一の特徴は、意識によって直接的には知覚されない無意識的な表象や、系としての無意識を論じる場合、フロイトは必ず、それらの存在を示す間接的な証拠を提示する点である。
フロイトによれば、「精神分析の技法」を用いて神経症患者を分析した場合、力動論的な意味での無意識的な「思想が心の生活に現存することについて、間接的ながら、意識によって提出される直接的証明にほとんど匹敵するほどの有無をわなわな証拠がなされる（強調——引用者）」（G.W., 8 : 433／全、十二、二七六）という。
しかしながらここで重要なのは、精神分析によって間接的に証明される無意識は、あくまでもフロイトの理論により構成されたものに、いええば、絶対的な実在としてあるのではなく、フロイトの理論と相対的な実在としてあるようにみえるという点である。フロイトは無意識の実在性に関して、二年後の論文「無意識」でも次のように述べる。「意識の所与は、常々と縦間の多いものであるため、「無意識というわれわれの仮定は必要かつ正統的であり、無意識の存在について幾重もの証拠を捉えている」（G.W., 10 : 264-265／全、十四、二一三）。意識的な行為のみを私たちの心の行為として認める場合、誤解行為や夢、また強迫現象などの病理的な心の症状を思いつくなどは、私たちにとって意味の間間を欠いた理解できない行為にとどまる。それに対して、もし私たちが「推論した無意識の行為をそこに挿入してみるならば、それらは証拠可能な関連性のうちに秩序づけられることになる」（G.W., 10 : 265／全、十四、二一三）。しかしこれまでここからいいうのは、推論された無意識の行為を挿入することによって、私たちの多様な心の行為について、意識のみからの観点に比べてより広範かつ秩序だった理解可能性を得ることに留まる。
この第一の特徴と連関する第二の特徴は、無意識概念が理論と事実のあいだで循環的に基礎づけられている点である。フロイトは「無意識という仮定に基づいて、意識過程の経過に対して目的的に発した影響を及ぼすための手順を組み立てることができたとすれば、この成功は、われわれが仮定しておいた無意識の存在にとどめての動かしがたい証拠となる（強調——引用者）」（G.W., 10 : 265／全、十四、二一三）という。ここには次のような循環がある。まず、観察された多様な心の動きを理解するために、ある仕組みをもつ無意識が推論される。次にその無意識の存在を前提にして、治療の手法が構築される。そしてその治療の成功の事実が、治癒の立場にある無意識の実在を正当化する。しかし治療の成功がそのまま、フロイトの無意識の実在を証明する「動かしがたい証拠」とまでいい切ることは適切なのだろうか。ここからフロイトの無意識の実在性を規定する別の条件を引き出すべきではないか10。

第三の特徴は、フロイトは意識から独立した無意識を認まず、意識と無意識の連続性を強調する点である。「意識のうちに突き出してこないある種の潜在的な思想」（G.W., 8 : 433／全、十二、二七六）というとき、そこではすでに、抵抗として感じられる生きた力を像に、意識と無意識が接している11。フロイトはそれを次のようにもいいえる。私自身の心の出

10 第４章 1節を参照。
11 フロイトはここで、意識は分割されうるという仮説を採用する論者を取り上げて批判する。そうした論者は、意識と無意識の連続性を重要視せず、表象や心の出来事は分離された意識を形成することができ、それぞれの意識は、「意識的な心の活動の主流となる集塊」から分離し絶対となりうると主張する。それに対してフロイトは、意識の分割の仮定は単に「意識的」という語の濫用から利益を得ているだけであり、「この語の意味を拡張
来事の中で、私の意識はどう結び付けていいのか分からないような行為や表現を判断し、解明しようとしたとき、人は、「無意識を発見するところへと向かうのか」と、そうではなくて、正確に言えば、別の第二の意識を仮定するところに至る。それは、私に知られている意識の第二の意識を仮定するところから始まるのである。この意識と無意識の連続性の強調はフロイト思想の要である。この点に関しては第四章において再び考察する。

以上のようにフロイトはあくまでも、それまでの哲学において主流であった、意識を中心においた記述では理解できない事象への精神の可能性を拡張するために、無意識概念を構築していたことが確認される。またフロイトの無意識は、フロイトの主張とは異なりいくらか構成的な性格をうつように思われた。フロイトの無意識の実在性の条件については、第四章において改めて考察する。

次章では論文「見解」の準備的な考察を踏まえて、「無意識」という概念がフロイトによりどのような叙述により構築されていくことになるのかを辿っていく。

3. 第一局所論における「無意識」概念の考察

本章では論文「無意識」においてフロイトが詳述する「無意識」概念を、メタサイコロジー的な叙述との関連を整理しながら明らかにしたい。論文「無意識」では後に「第一局所論」とよばれることになる、心を意識・前意識・無意識の三つの系を構造として図式化する理論がフロイトにより展開される。さらにフロイトはこの論文で、自身的精神分析研究の完成もと四五の観察法を「メタサイコロジー」とよび、それを次のように言い表す。

「心的な出来事を、力動的、局所的、そして経済的な関係に従って記述することに成功すれば、それをメタサイコロジーの示しと呼ぶことを、私は提案したい（強調——フロイト）」（G.W., 10:281通、十四、二三〇）。本章では第一に、フロイトの第一局所論における無意識を叙述する観点となるメタサイコロジーの力動論、局所論、経済論をそれぞれ明らかにする。第二に、それによって叙述される無意識概念を理解する上で重要な「抑圧」の機制と欲動との複雑な関係性を検討する。以上の考察を通して、これらの叙述によって提示される第一局所論のフロイトの無意識を簡潔に提示する。

して、その所有者すら何も知らない意識をも表示できるようにする権利はわれわれにはない。哲学者たちは無意識的仮想の存在を信ずるのには困難であると考えるにしろ、わたしからするなら、無意識的意識の存在の方がより多く攻撃を受けるべきものに思われる」（G.W., 8:434通、十三、二ニ什）と述べる。

論文「無意識」でもまたフロイトは、心の生活の潜在的な状態と意識的な心の出来事の間には、「豊富な接触点」があることを強調する。それら潜在的な状態は、一定量の仕事によって、意識的な心の出来事への変換や代替が可能であり、潜在状態は「意識から脱落ちているというその点においてのみ」意識的な意識から区別される。そのため、両者を心理学的研究の対象として、「意識的な心の行為とのきわめて密接な関連の下に取り扱うことを、ためらってはならない」（G.W., 10:267通、十四、二ニ四）。
3.1. 論文「無意識」におけるメタサイコロジー

論文「無意識」においてフロイトは、心の働きを力動論、局所論、経済論という三つの契機から叙述し、それを自ら「メタサイコロジー」とよび表わす。フロイトはこのメタサイコロジー的な叙述を通じて、心を意識・前意識・無意識という三つの系として提示する第一局所論を展開するのである。したがってフロイトの無意識を理解するには、まずフロイトのメタサイコロジーを、つまりそれを構成する三つの視点をそれぞれ理解する必要がある。

まずフロイトは論文「見解」を引き続きつつ、「無意識性」という心的な性質は、記述的な意味や力動論的な意味などの多義性を含むこむことを確認する。そしてフロイトは、精神分析は「心の出来事の力動的理論」を加えて、「心の局所論を考察」することによって、「記述的な意識心理学から一步距離を取って、新しい問題設定と新しい内容とを備えるに至った」（G.W., 10：272／全、十四、二一九）と述べる。つまりここでフロイトは、無意識を含む心を力動論的、および局所論的見地から考察することによって、精神分析は無意識を記述的な意味で把握する心理学から距離を取ると述べる。

心の出来事に対する力動論的見地とは、前章で論及した「無意識」の力動論的な用語法と、同じく、意識と無意識のあいだの力関係である検閲や抑圧に着目する視点であるとされる。それぞれに対して局所論的見地とは、「相互に重層的に秩序づけられた心的な系への関連性や所属性」（G.W., 10：271／全、十四、二一九）に従って、心の出来事を分類し関連付ける視点である。フロイトは、心の出来事の重層的にいくつかの層が常に異なる複数の領域があると考えていた。観察された多様な心的行為から異なる特性を識別し、その特性をそれぞれ保持した心的な系を推論できるとフロイトは考えたのである。こうしてフロイトは、意識の特性を持つ系をドイツ語の「Bewusstsein（意識）」の頭文字をとって「Bw」ともしくは「Bw 系」とび、同様に無意識の特性をもつ系を「Ubw」もしくは「Ubw 系」という略記号で示す。

Bw 系と Ubw 系は、検閲とよばれるある種の試験により隔てられ、Ubw 系に属する無意識的な心的行為は、検閲の試験に拒絶されれば Bw 系への移行は不首尾に終わる。そのときこの心的行為は「抑圧された」といわれる。検閲の試験に耐え抜ければ、心的行為は Bw 系とよばれる第二の系に入ることになる。しかしながら、正確にいえばこの心的行為は意識に参入できる状態にあり、いかえればいくつかの条件がそろえば、抵抗にあうことなく意識の対象となりうる状態にある。この意識への参入可能な状態の相を、フロイトは改めて「前意識」とよび、それを「Vbw」もしくは「Vbw 系」という略記号で示す。したがって、厳密な検閲が立ちはだかるのは、Ubw 系から Vbw 系への移行にあるということになる。このように心を三つの異なる特性をもつ系からなるものとして仮定し、「任意の心の行為について、どの系の内部で、またどの系とどの系の間でその行為が行われたのかということを説明しよう」ということを述べた。

12心のこうした捉え方は、1900年の『夢解釈』において「心的局在性（Psychische Lokalität）」という概念のもとに導入される。フロイトはここで、心の働きを解明するために心を機械的な装置として想定し、「心の作業に仕えている道具立てを、たとえば組み立てられた顕微鏡、あるいは写真機、のように思い描いてみる」ことを提案する。このとき、心的局在性とは「ある装置の内部のある場所に対応し、その場所において、像のいくつかの段階のうちの一つが結ばれることということもになる。この試みは「心的な営みを分解し、装置の各部の成分に、個々の営みを割り振ることで、心的な営みの複雑さを理解できるようにしようとする」というものであるとフロイトはいう。心の装置のそれぞれの構成成分を、フロイトは「事象（Instanz）」もしくは「系（System）」とよぶ（G.W., 2/3：541-542／全、五、三二五・三二六）。

うとする」見方が、局所論的見地である（G.W., 10: 272／全、十四、二二〇）。局所論は論点「見解」における「無意識」のシステム的な用語法を引き継いだものである。

このように、抑圧や検閲によって心的な系のあいだに境界線が引かれるのであるから、力動論と局所論は紛々に絡めついた視点である。第一局所論におけるフロイトの無意識とは、この心的系のもつとしての無意識である。したがって、この系としての無意識の特徴を指し示すことのできない記述的用語法としての「無意識」は、フロイトの無意識概念の構築において必要とされなくなるのである。

この局所論的見地から、フロイトの無意識概念はその特異な性格を示し始める。フロイトは既に 1900 年の『夢解釈』において、夢の分析から Bw 系、Vbw 系、Ubw 系それぞれの働きや特性を描き出している。それぞれの心的系の特徴の解説は他書に任せることにして、本節では続いてメタサイクロジーの第三の経済論的見地について検討する。経済論的見地とはどのような見方であり、フロイトはなぜそれを必要としたのだろうか。

論文「見解」から考察を始めた私たちは、フロイトが「無意識」の記述的用語法を自らの無意識概念を成形するための視点として用い、それに対して「無意識」の力動論的用語法、およびシステム的用語法を、それぞれ力動論、局所論として引き継いだことを確認した。それに対してフロイトがメタサイクロジーにおいて提示する経済論という見地は、いうならばフロイトの無意識論に留まらず、フロイト精神分析の全体を初期から規定する視点である。用語の説明から入れば、フロイトのいう経済論とは、心的エネルギーというある種の量を想定し、それを変遷として心的現象を説明する経済的見地である。フロイトの思想は、無意識論を含めて初期から一貫して、その当時の自然科学的な思潮から影響を受けたエネルギー論という枠組みで構築される。したがってフロイトの無意識を規定する経済を理解するためには、エネルギー論を前提とした彼の基本的な人間観を先に理解する必要がある。

フロイトの人間観の最も大きな特徴は、「欲動（Trieb）」を人間理解の根底におく点である。当時の自然科学における支配的な思潮と同じく、フロイトは、人間を動かしているのは、人間の有機体の内部に働いているエネルギーであると考えた。人間以外の動物の場合、このエネルギーを生存行動へと導く水路は遺伝的に決定されている。動物に内在するこのエネルギーの水路、すなわちその種に固有の行動パターンをフロイトは「本能（Instinkt）」（G.W., 10: 294／全、十四、二四五）とよぶ。しかしながら人間の場合、有機体内のエネルギーは遺伝的に決定された水路を持たない。たとえば人間の性欲動の場合、それは生粋行為に留まらずその他の多種多様な行動を導く。この人間的な特徴を意味するために、フロイトはこのエネルギーを本能と区別して「欲動」とよぶのである。

欲動概念が体系的に考察された 1915 年の論文「欲動と欲動運命（Triebe und Triebschicksale）」（以下論文「欲動」）によれば、欲動の刺激の発生源は私たちの身体の内部にあるために、外的な刺激であれば可能な逃避活動も欲動では意味をなさない。そのため、欲動は恒常的な力として働く。フロイトはここで、人間のさまざまな行動の後に想定される源泉としての欲動を二つ考え、それを「原欲動（Urtrieb）」とよぶ。その二つとは、「自己保存欲動」と「性欲動」である（G.W., 10: 216-217／全、四、一七四）。

この欲動の体系化は、フロイトによるいくつかの思弁的な仮説を含意されている。その第一は、心の装置は快の獲得を目指し、不快を回避しようとすなわち「快原理の支配下にある」という仮定である。ここにはフロイトの第二の仮説、すなわち、有機体の内部で発生する欲動刺激の増大が、不快の感覚として、刺激の減少が、快の感覚として知覚されるという
フロイト精神分析（第一局所論）における「無意識」概念の検討

仮定も含める（G.W., 10: 214／全、一四、一七一）。フロイトは性欲動の心的エネルギーを「リビドー」とおよび、このリビドーという興奮源が、心的装置の各系に備えられるさまを記述することで、心の働きを説明することができると考えたのである。このように「興奮量の運命を追跡し、少なくともその相対的な評定を行おうと努める」見方が経済論的見地である。ここにおいて、フロイトのメタサイクロジー的示現に現れる三つの視点は出そろったことになる（G.W., 10: 280／全、十四、二三〇）13。

以上のように明らかにされた力動論、局所論、経済論的な三つの契機から、フロイトは心の構造を意識・前意識・無意識という三つの系からなるものとして語る。次節では引き続き、第一局所論における無意識の内実を検討する。

3.2 〈力〉と〈意味〉としての無意識—欲動と抑圧の検討

第一局所論における無意識を理解するためには、それとメタサイクロジーの三つの視点との連関を正確に把握する必要がある。フロイトの無意識を述えるためのこの三つの視点と最も密接にかかわる心の働きが、「抑圧（Verdrängung）」である。力動論的視点を特徴づけるのが、抑圧や検閲とよばれる抑圧と無意識のあいだの力の働きに着眼することであった。またこの抑圧によってひらかれる境界線によって、Ubw 系と Ubw 系が区別される局所論が導入されることを確認した。それでは、抑圧によって意識から区別される無意識の内実とは何なのか。また抑圧を遂行する心の仕組みとはいかなるものなのか。抑圧とメタサイクロジーの三つの視点との連関をときめきするために、本節では再びフロイトのエネルギー論、すなわち欲動概念を詳細に検討する。本節ではフロイトの無意識の特徴とそれの内実を明らかにするために、欲動と抑圧の機制、およびそれとメタサイクロジーとの関連性を丁寧に検討する。

論文「無意識」の「抑圧の局所性と力動性」と題された第四章で、フロイトは次のように述べる。「抑圧というものは基本的に、Ubw 系と Vbw（Bw）系との境界にある表象に関して遂行される過程であり、そのときに問題となるのは表象に対する「備給の撤収」である（G.W., 10: 279／全、十四、二二八）。つまりフロイトは、ある表象はリビドーが備給されると意識的になり、反対にそれが撤収されると抑圧されて無意識的になると考えていた。したがって抑圧の働きを説明するのはエネルギー論、つまり経済論的視点である。このように考えると抑圧された無意識の内実は、リビドーが撤収された表象として理解される。しかしながら、別の箇所でフロイトは、「われわれは精神分析の経験から、抑圧過程の本質は、欲動を代表する表象 (den Trieb repräsentierende Vorstellung)」が「意識になることを妨げる」

13 1920年の『快原理の彼岸（Jenseits des Lustprinzips）』ではメタサイクロジー及び経済論は以下のよう説明される。「心の出来事は快原理によってその経過が自動的に制御される。われわれは精神分析の理論において無観者に仮定している。すなわち、心の出来事はいつでも、ある不快な緊張に刺激されて始まり、ついて、最終結果がこの緊張の低下に合致するように、つまり、不快を回避し快を産出するように、蛇きられ経過してゆっくりと信じている。これまで研究されてきた心のプロセスを、心の出来事のこうした経過をにらみつつ考察するならば、経済論的観念がわれわれの仕事のうちに導入されることになる。思うに、局所論の契機と力動論の契機に加えてさらにこの経済論的契機を考慮に入れる叙論が、現在考えられるかもっとも完備した叙論であって、メタサイクロジー的叙論という名を与え、特記するに値するものである（強調フロイト）」（G.W., 13: 3／全、一七、五五）。
ところにあることを学び知った」（G.W., 10: 264／全、一四、ニ一）ともいう。この「欲動を代表する表象」とは何を指すのか。抑制の機制を理解するために私たちは、フロイト精神分析における欲動とそれの心的平面における代表、および表象とのあいだの難解で問題含み関係をまずは理解しなければならない。

前節で確認したように、欲動とはまず人間の身体内に働くエネルギーである。しかし、欲動とそれの心的代表という概念に関してはフロイト自身の論述にも揺らぎがあり、精神分析における解釈の分かれ道があると、フロイトの著作の英語版への翻訳者であるJ・ストレイチー（James Strachey 1887-1967）は指摘する。フロイトは欲動について最も体系的に考察した論文「欲動」の、まさに欲動の定義について述べているとされる箇所において、欲動とは、「心的なものと身体的なものとの境界概念としてわれわれの目に映る」、すなわちそれは、「身体内部に発心の内へと達する刺激を心的に代表するもの（psychischer Repräsentant）」（G.W., 10: 214／全、一四、一七二）であると述べる14。すなわちここでフロイトは、「欲動」と「欲動刺激を心的に代表するもの」は同じものであるかのように語っている15。

しかし一方でフロイトの論述には、欲動とそれの心的代表を明瞭に区別して述べる箇所も散見されるのである。たとえばフロイトは、論文「無意識」において、「欲動は意識の対象には決してあり得ず、欲動を代表する表象のみが、意識の対象になり得る。しかしまた欲動は、無意識においても、表象によって代表されるしかない」（G.W., 10: 275-276／全、一四、二二四）と述べる16。以上のことからストレイチーは、「『欲動』は、身体的なものか

14 フロイトの著作の英語版全集（Standard Edition 以下 S.E.）に所収の『欲動と欲動運命』に付されたストレイチーによる「編者解説」によれば、ここで用いられたドイツ語の Repräsentant は、「法律的ないし社会体制上の代行者」という限定的な意味で用いられる語で、フロイトによるこの語の用例は少なく、その後はより一般的な語である Repräsentanz が用いられている。この指摘を行った上で S.E. は、Repräsentant と Repräsentanz の両方を representative という一つの英語で訳っている。フロイト全集では、Repräsentanz の訳語として「代理」、「代理表現」とある代をあっている（全、一四、三六二）。

15 フロイトが「欲動」とその「心的代表」を同じ意味合いで言及している箇所は次の通りである。第一に既に本文で引用した、論文「欲動」における、「欲動」とは「身体内部に発心の内へと達する刺激を心的に代表するもの」であるという一節。さらに 1911 年の論文「自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察 [シューレーバー]」（Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia paranoids)）では、「われわれは、欲動を心的事象に対する身体的事象の限界概念として理解しており、欲動において有機的諸力の心的な代理表現を認め」と書いている（G.W., 8: 311／全、一九、一七九）。そしてまた、論文「欲動」の数か月前に書かれた「性理論のための三篇 (Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie)」の第三版に加えられた文では、「欲動」とは「連続して流れている内身体的な刺激源の心的代理にほかならないと理解すことができる」、「心というものを身体的なものから区別する境界づけの概念の一つである」と書いていている（G.W., 5: 67／全、六、二四三）15。（ニ一）。これに続く三つの記述は、フロイトが欲動とその「心的代表」とのあいだに何の区別もつけていないということを简单に示しているようであると S.E. と述べる。

16 フロイトが「欲動」とその「心的代表」を明瞭に区別している箇所は次の通りである。第一に既に本文で引用した論文「無意識」における、「欲動は意識の対象には決してあり得ず、欲動を代表する表象のみが、意識の対象になり得る。しかしたまた欲動は、無意識においても、表象によって代表されるしかない」（G.W., 10: 275-276／全、一四、二二四）という一節。また論文「抑圧（Die Verdrängung）」では、「欲動の心的な（表象の）
プロイト精神分析（第一局所論）における「無意識」概念の検討

ら心に対しての『代表』そのものであるのか、または、『欲動』がさらに何らかの『代表』を心に向かって送り込むであろうかということに関して、プロイトの論述は議論の余地を残している（全、一四、三六二）と指摘する。前者の見解では、欲動そのものが、身体的な力の心的な代表（the psychical representative of somatic forces）とみなされているのに対して、後者の見解では、欲動それ自体は心的ではない何か（something non-psychical）とみなされている17。

ストレイナーに議論の余地が残されていると評されたこの箇所に、プロイト精神分析における重要な主題を現す解釈を展開するが、精神分析を解釈学として理解するリクールである。リクールは、エネルギーとしての欲動は心的代表の中にみずからを示し、明らかにし、〈意味〉としての表象として現れると述べる。そしてそれを可能にするのが、プロイトにより特に何の説明もなく要請される欲動の「Repräsentz（代表）」の機能であるとリクールはいう。

リクールによれば〈欲動の心的代表〉こそが、プロイト精神分析における〈力の言説〉と〈意味の言説〉の一致点であるという。プロイト思想とは〈力〉と〈意味〉の混合語法である。それはつまり、プロイトは初期から一貫して、心の働きを欲動というある種のエネルギーの働きによって、つまり〈力〉の表現を用いて理論化する。しかしながら同時にプロイトは、そうした欲動の経済論によって構築される夢や神経症に隠された〈意味〉を解釈する。ここに一見するとアポリアが浮き彫りになる。〈力〉としての欲動の次元と、私たちに解釈可能な表象の〈意味〉の次元には、大きな隔たりがあるはずである。しかしプロイトはその両者を、欲動の〈代表〉の機能によって一層で架橋する。〈力〉としての欲動は、自らを心的平面において代表し、心的代表として〈意味〉の次元に到達する。つまりは私たちによって解釈可能なものとなる。だからリクールは、「もっと根本的に、欲動は心的平面で身体を魂の中で代表する、表現する」（DI, 140＝1982:147）と述べる。

この欲動の定義のうちに記入された〈代表〉の機能にプロイトは何の証明も与えていない。プロイト精神分析においては〈代表〉の機能が、無意識から意識への転化や翻訳を可能にする。つまりこの機能こそが、意識と無意識のあいだには系を分離する境界線があるにもかかわらず、両者は共通の構造をもつという仮定なのである。だからプロイトは論文「無意識」の冒頭で何の前提きもなく、「われわれは無意識を、それが意識への転化や翻訳を経過したあとでしか、識ることはできない。精神分析の作業は、日々、このような翻訳が必要であることを教えている」（G.W., 10:264／全、十四、二一）と述べることができるのである18。

代表」について語り、原作のにおいては「当該の代表は不変のままに存在し、欲動は、その代表に結びついたままになる」と述べる（G.W., 10:250／全、一四、一九七一九八）。さらに同じ論文でプロイトは、「欲動代表というものを、一定の心的エネルギー（リビド、関心）の生をもって欲動からの供給を受けている表象または表象群である」と述べる（G.W., 10:254-255／全、一四、二〇二）。

17 S.E.によれば、欲動の性質についての相異なる二つの見解の双方が、その後のプロイトの著作においても見られるが、数としては後者の見解の方が多いという（S.E., 14:111-113）。

18本文では検討することができないが、プロイトによれば欲動を代表するものは、表象のほかにもう一つ「情動総計（Affektbetracht）」もしくは「情動（Affekt）」がある（G.W., 10:255／全、十四、二〇二）。この「情動」をめぐるリクールの解釈については、池田（1985）を参照。
したがって本節冒頭の問いにもどれば、抑圧された無意識の内実とは、欲動のエネルギーであると同時に、欲動を心的平面において代表した表象であるといえよう。だが、それらの欲動は心的領域において表象によって表現されると、簡単にいい切ることもできないのである。つまり欲動の心的代表と、私たちに解釈される表象を同じものであると早計に理解してはならない。ここには更にうもう一点、欲動と抑圧をめぐる複雑な点を理解する必要がある。

フロイトによれば抑圧とは、意識的な心の活動と無意識的な心の活動とのあいだに鋭い区別が打ち立てられた後で成立したものであり、「その本質は、意識なものを作り出し、遠ざけしておくことにある（強調——フロイト）」（G.W., 10:248／全、四、一九七）。フロイトがここで明らかにするのは、抑圧が発生する理由と、その仕組みである。欲動を描き上げた強者は、全て等しく快を得ることであるならば、なぜそれが抑圧される必要があるのか。

フロイトによれば、正確にいうと抑圧には二つの段階がある。フロイトはそれを、「原抑圧」と、「本来固有の抑圧」もしくは「踏襲性抑圧」とおよび、私たちが日常的にいう抑圧は、後者のことを意味するという。

原抑圧とは、抑圧の最初の相期であり、それは「欲動の心的な（表象の）代表（der psychischen (Vorstellungs-) Repräsentanz des Trieb）が、意識的なものの中へと受け入れられることを希望するというに存している。そしてこれによって、固着が成立する。ここからは、当該の代表は不変のままに存続し、欲動は、その代表に統合されたままである（強調——フロイト）」（G.W., 10:250／全、一四、一九七—一九八）。固着とは、「ある欲動あるいは部分欲動が、正常の場合に予見されるような発達を示さず、この発達制御の結果、ある幼児段階に留まる事態」（G.W., 8:303-304／全、一—一七〇）である。

それに対して抑圧の第二の段階が、本来固有の抑圧、もしくは踏襲性抑圧ともいうべきものである。その抑圧は、原抑圧に宿した欲動の心的な「代表の心的な 蔵 （die psychische Abkömmlinge）に対して向けられるか、あるいはその代表とは別のところに由来しつつも、その代表との連想関係を持つようになった思考系列に向けられる」（G.W., 10:250／全、一四、一九八）。ここで全集では「 蔵 」と翻訳された「Abkömmlinge」というドイツ語は、薬や若枝の他に子孫という意味をもつ語であり、英語では「derivatives（派生物）」と訳されている。この第二の抑圧の担い手は自我であり、自我はその欲動を意識化することを嫌悪し拒絶するから抑圧が生じる（G.W., 8:304／全、一—一七〇）。つまり、「抑圧の条件なるものは、満足の快よりも（自我の——引用者）不快の動機がより強い力をもつこと」である（G.W., 10:249／全、一四、一九七）。このときに、その欲動代表の心的な薬、いかえれば派生物は、自我によりリビードの儒教が惹起され、意識への突入を妨げられるのである19。

---

19 儒教の御考と抑圧に関しては、論文「無意識」の特に第7章において、フロイトにより更に踏み込んだ考察がなされているのでここで確認しておく。フロイトは、抑圧の過程は儒教の抑圧が問題となっていると述べた箇所のすぐあとに、抑圧された表象はUbw系のなかで実効力を保持しているという事実を指摘する。その事実を説明するためにフロイトは、抑圧された表象は「儒教も保持している」のでなければならない、「儒教されたものは
この原抑圧と踏襲性抑圧の区別が示すのは、私たちが意識化し知ることができる欲動の心的代表と、欲動の原初の代表には大きな隔たりがあるということである。このように理解すると、Ubw 系には、原抑圧に服した欲動の原初の心的な代表としての表象がある。それに対して、Bw 系には欲動の心的な代表の派生物しか突着しえない。私たちが原抑圧と越えて欲動の原初の代表に達する方途について、フロイトは一言も語らなかった。したがって、私たちに意識化される表象は、欲動そのものでも、欲動の心的な代表そのものでもなく、原抑圧によって Ubw 系に抑圧された欲動の代表からの派生物なのである。さらに Ubw 系における欲動の心的な代表も、欲動そのものの姿ではなく、〈代表〉の機能によって欲動自身が表象としてその姿を現したものなのである。このような形で無意識は体系としているといえる。

以上の考察をふまえるならば、論文「無意識」の第五章「Ubw 系の特別な特性」において、フロイトが Ubw 系の第一の特徴として述べた次の文がよく理解できるだろう。すなわち、Ubw の核は、「その備給を放散させようとしている欲動代表から、すなわち欲望の蓄きから成立っている」（G.W., 10: 285/全、十四、二三四）。ここにこそ、〈意味〉と〈力〉の混合語法としてのフロイトの思想の性格が端的に示されている。フロイト思想はまず第一にエネルギー論であり、〈力〉としての欲望は発散されることを求めていている。しかしながら欲動は、〈代表〉の機能によって〈意味〉の次元に到来し、欲動代表から派生する表象として私たちに解釈される。したがって Ubw の核は、〈意味〉の次元の「欲動代表」であると同時に〈力〉の次元である「欲望の蓄き」なのである。

20 論文「無意識」の第五章でフロイトはこの箇所に続けて、『夢解釈』の考察から引き継ぐ形で Ubw 系の特徴を「無矛盾性、一貫性（備給の可動性）、無時間性、心的実象による外線の実象の代替作用（強調――フロイト）」端的に要約する。この要約された Ubw 系の特徴をフロイト自身が詳説したのが、彼の主著である 1900 年の『夢解釈』第七章である。
以上の考察から、フロイトの無意識とは何かという問いに対しては、次のように答えることができる。第一局所論におけるフロイトの無意識とは、自我によって抑圧され意識とは区別されるひとつの心的な系である。無意識の内実は〈力〉としての欲動のエネルギーであるが、それは欲動の〈代表〉の機能によって、同時に欲動を心的平面において代表するものから派生物としての、〈意味〉としての表現により構成された維状組織である。このように非記述的な仕方で、かつ力動論、局所論、経済論的見地から解釈されるのが、第一局所論におけるフロイトの無意識である。

4. 無意識と解釈学的意義

本章ではこれまでの考察をふまえて、第一にリクールのフロイト解釈を参照し、フロイトの無意識の実在性の条件を検討する。第二に、フロイトによる無意識概念の構築過程をリクールの言葉で再び辿りおさすことにより、無意識と連関する「意識」概念の変容を明らかにする。その後でフロイトの無意識の受容による意識の変容を、直接意識から解釈学的意識への転化として示し、最後に、局所論的意識と無意識、および主体との連関を考察する。

4.1. リクールによる「無意識」概念の批判的検討

前節まで私たちは、フロイトによる無意識概念の構築過程を辿り、メタサイコロジー的に示されるフロイトの無意識を明らかにする。夢や神経症といった事例の分析から推論され構築されたフロイトの無意識は、「無意識」という用語により日常的に指し示される意義とはかなりの隔たりをもつことが確認された。しかし同時に、フロイトは自らが構築した無意識の絶対的な実在性を主張する。私たちは、フロイトが主張する無意識の実在性をどのように理解するべきなのか。本節ではフロイトの無意識の緻密な認識論的検討を行ったリクールの議論を考察する。

リクールによれば、フロイトが無意識の実在論を要請することは疑いない。しかしリクールは、フロイトによる無意識の実在論が可能となる条件を問うことが重要であるという。

まずリクールは、フロイトの無意識は経験的実在論であることを指摘する。「局所論によつて認識しいうる実在は、欲動の心の代表の実在であって、欲動そのものの実在ではない。経験的実在論は、認識しえないものでなく、認識しいうるもの実在論である」（DI, 421＝1982:480）。つまり、精神分析は「欲動を代表する表現」を通して無意識を知る経験的実在論であるため、フロイトの無意識は本質的に知られうるものである。

さらにリクールは、経験的実在論としての無意識の「（実在）は『診断された』実在とししてしか存在しない」と述べ、「無意識の実在は、絶対的実在でなく、無意識に意味を与える操作と相対的なものである」（DI, 423＝1982:482）。つまり、フロイトの無意識とは理論や解釈にもとづいて構成されるものである。リクールはフロイトの無意識を構成する条件をまとめて、「無意識（一般には、局所論のなかに体系化された実在）は他者によって、解釈の規則にもとづいて、実在としてつくらされている」（DI, 424＝1982:483）と述べる。

まず第一に、第一局所論の無意識は「解釈の規則」、いいかえればフロイトのメタサイコロジーという理論にもとづいて構成されるものである。前節で詳細に検討したように、Uvw系とVbw系とのあいだの交通が、欲動が表現として現れる〈代表〉の機能によって保証され、規定されているからこそ、Vbw系における無意識の欲動の心の代表から派生物を解釈
フロイト精神分析（第一局所論）における「無意識」概念の検討

することによって、Ubw 系における欲動の起源へと達することができるのである。つまり第一局所論における無意識は、メタサイコロジーによって規定された Bw 系と Vbw 系との関係性においても定義される。

第二に無意識の実在は、他の意識によって解釈されることによりはじめて意味が与えられる。他者の意識とは、余りに精神分析家の意識である。つまり無意識は、精神分析家による解釈を通じて、間主観的な状況において構成されるのである。したがってフロイトの無意識は、孤立した一人の人間の内面で構成されるものではない。

以上を総括すれば、フロイトの無意識とは、経験的かつ構成的な実在である、とまとめることができるだろう。これはいかえれば、「精神分析では、理論はおそらく精神分析の実際に対して、構成的実在を持っている」（DI, 420=1982:479）ということを意味する。したがって、第二章で検討した精神分析における理論と事実の循環的な基礎づけから、フロイトが主張するような無意識の実在性の「動かしつたい証拠」を見出せないからである。

この無意識の限定された実在性の性格を忘れてしまうと、精神分析は素朴実在論に堕してしまう。素朴実在論とは、もはや欲動の変形的な実在論でも、構成的な実在論でもなく、「終了した分析によって繰り上げられた最終的な意味を、事後に無意識のなかに投射する実在論である」（DI, 425=1982:484）。素朴実在論は、無意識は思考しないというフロイトの言語21と反して、無意識のなかに、意識の代わりとなるような思考能力ともとに、想像的な現実性をも付与してしまうことになり、「無意識的な意思という概念論の怪物」（CI, 109）をつくりだしてしまうとリクールはいう。

さらにいえば、フロイトが無意識の記述的な用語法を批判していたのも、それが安易に無意識の素朴実在論に堕してしまう危険性があることを熟知していたからだといえるだろう。私たちもとすれば、記述的な意味での無意識的なものを、実体的な無意識として想像してしまう。つまり、潜在的な意識状態を「無意識」として実体視してしまう。それは結果として、意識されている状態が潜在的な状態に移行することができる、あらゆる表象や感情を無意識の内実として承認することになり、「無意識」概念の意味の規定を困難にしてしまう。だからフロイトは、無意識の記述的用語法はそれとして認めつつ、自身にとっては確かな実在性をもつ解的な系としての無意識を構築する際にはその視点を排し、力動論、局所論、経済論的な叙事を採用したのである。

4.2 直接意識から解析学的意識へ

本稿では、第一局所論におけるフロイトの無意識を明らかにし、さらに前節においてそれの制限つまりの実在性を承認した。主体の内部に私たちには直接的に知覚できない無意識を承認するフロイト思想は、当然デカルト主義の強烈な批判者となる。それでは無意識を受容し、意識と主体との等式が崩れ去った後に、主体と局所論的な意識・無意識との運転を、私たちはどのように捉えればよいのか。本節では精神分析における主体を主題的に考察したリクールを参照し、本稿を通じて行った無意識の考察を再び辿りなおす。ただし、本節で焦点

21 フロイトによれば Ubw 系には、「否定もなく、懐疑もなく、どんな確実性の程度といったものもない。こういったものすべては、Ubw と Vbw のあいだの検閲の作業によって初めて持ち込まれてくる」。「Ubw には、単に、内容がより強く備給されているか、より弱く備給されているかということしかない」（G.W., 10:285／全、十四、二三五）。
の当たるのは「意識」概念である。無意識と緊密な術語連関のうちにある意識は、当然、無意識概念の応用したいによってその意味を変える。フロイトの無意識論による意識概念の変容を明らかにしたうえで、精神分析の主体のあり方を描き出すための予備考察を行いたい。

フロイトによる意識の地位の格下げは、第二章で考察した無意識論の展開によって示される。ここで注目したいのは、フロイトが無意識という概念を、記述的な用語として、つまり形容詞（「無意識的 *unbewußt*」）として用いていた段階から、システム的な用語として、つまり局所論的な名詞（「Ubw」）として用いたときに生じた変化である。

記述的な意味の形容詞として「無意識」が用いられている場合、それが意味するのは、意識との関連において、無意識が（潜在状態）として定義されているということである。この時点での無意識であるという状態は意識に対して、まだ了解されている。なぜなら、ここで無意識の質とは単に、意識の中で消えているが再び現れるかもしれないものの属性を意味するからである。知られていないものは意識の側ではなく、無意識の側にある。無意識とは、われわれがそれを仮定して、意識から借りた指標でって再構成するものである（DI, 12241982:130）。この視点はデカルト主義的な人間観とかなり、序章で引用した国語辞典における「無意識」の第二の用例とも一致する。

しかし「無意識」が記述的概念を局所論的概念に移行したときに、観点の逆転が始まる。ここにおいて「無意識が意識との関連において定義されるのは、もはや欠如性や潜在性としてではなく、表象が宿る局所としてである」（DI, 41241982:470）。Ubw系において〈代表〉機能による、欲求は表象として〈意味〉の次元に到来する。まずUbw系における物表象があり、次に、それが過剰流露されることで意識的になる可能性がある。したがって「意識は必然ではなく、無意識において生起するものである」（DI, 12341982:131）。このときそれまで〈意味〉の発生する場であった意識は「脱中心化」とされ、意識から無意識へと「〈意味〉の誕生の場の移動」がおこなわれる（DI, 41041982:467）。つまりこのことで私たちはフロイトにより、「まだ直接意識の観点に属している記述的観点から、意識それ自体が他のいくつかの心的局所のなかの一つになる、局所論的、経済論的観点へと」導かれたのである（DI, 41141982:469）。このとき、私たちにそれまで自明であった意識は、自身の〈意味〉を所有していないことに気づく。フロイトの無意識論を承認すること、つまり局所論的な意識と無意識を受け入れることは、私たちに直接意識を放棄させるのである。

それでは、直接意識を放置した後に、主体と意識の関係とはどのようなものになるのだろうか。つまり、フロイトによって構築された心的局所としての無意識と意識は、主体とどのような関係をもつのだろうか。これに関して、フロイトは全くの口を閉ざしている。なぜなら

22 1900年『夢解釈』において、フロイトの意識概念の捉え直しはすでに開始されている。フロイトによれば、私たちが心のものの由来を正しく洞察するために必要するのは、「意識という特性の過大視を見直すことである」（G.W., 3: 6174全、五、四一七）。精神分析のような呈示の方式をとった場合、「かつては全能とされ他のすべてを覆い隠していた意識」に残されている役割とは、「様々な心的な質を知覚するための一つの感覚器官としての役割に他ならない（強調——フロイト）」（G.W., 3: 6204全、五、四二〇・四二一）。つまり、かつては全能であるとされ、主体と同一視された意識は、フロイトによって知覚の機能にまで縮減されるのである。
フロイト精神分析（第一局所論）における「無意識」概念の検討

ラフロイトは主体と意識、無意識との関係を語る前に、そもそも主体についてさえも全く語らないからである。23

しかしながら、フロイトが明確に語らなかった精神分析における主体をリクールは、「傷ついたコギト（Cogito blessé）」として再構成する。精神分析の批判と挑戦を引き受けた「傷ついたコギト」とは、「実在の意識の不全性、錯覚、虚偽を自認すること」（DI, 425 = 1982:485）によってしか、自己を描定できないコギトである。そしてリクールは、「傷ついたコギト」として表されるフロイト的主体において、放棄された直接意識のあとに構成される意識のあり方を、「解釈学的意識（conscience herméneutique）」（DI, 419 = 1982:478）とよぶ。本節では最後に、解釈学的意識と無意識との術語連関を考察することで、リクールのフロイト解釈における主体と意識との関係を描出したい。

リクールは、局所論的な無意識概念の受容による、意識から無意識への〈意味〉の脱中心化の課題は、「解釈における〈意味〉の再開という第二の課題と切り離さない」と述べる。この直接意識の放棄による〈意味〉の離脱と、解釈における〈意味〉の再開の交替は、フロイトのメタサイコロジーの哲学的原動力である。そしてこの〈意味〉の離脱と再開の経過を、前章で考察した〈欲動の心的代表〉である。リクールは〈欲動の心的代表〉こそ、直接意識の「放棄」の運動が、それに対応する「取り戻すこと」の運動として、真性のコギトに比肩することを求める「意識的になること」の開始点として、意味の再当の始まりとして現れる折り返し点であるという（DI, 416 = 1982:475）。

フロイト思想において無意識の欲望は、〈意味〉と〈力〉とが合体された言表である。しかしこの欲望の起源に到達するためには、言表の意識的な〈意味〉を放棄し、〈意味〉の中心を無意識へと移動させなければならない。それが〈意味〉の離脱の契機である。しかしUbw系の欲望は、それを代表する表象を解釈することによってしか理解することができない（DI, 412 = 1982:469）。したがってリクールは次のようにいうのである。

意識性は廃棄されることも、破壊されることもできない。たしかに、欲動の心的代表という概念が〈意味〉を帯びるのは、意識的になることの可能性、務めとしての意識化、との関連においてである。この概念は次のことを意味する。すなわち、欲動の一次代表がいかに迂遠なものであろうとも、その代表の派生物がいかに歪曲されたものであろうとも、それらはまだ〈意味〉の範囲画定に属している。それらは原則として、意識的現象の用語に翻訳することができる。要するに、精神分析は意識への回帰として可能である。なぜなら、ある意味で、無意識は意識と同質なのであるから。意識は、無意識の絶対的他者ではなく、相対的他者なのである（強調——引用者）（DI, 417 = 1982:476）。

23 リクールによれば、「フロイトは、本源的な主体という問題意識に欠けており、それを拒絶している」（DI, 408 = 1982:466）という。それまでの哲学において主体に据えられる、意識や自我は、フロイトによりすべて欲動の分化として説明されるからである。フロイト思想において、本源的な主体としてのコギトがそのつど逃げ出してしまうことを、リクールはフロイト思想における「自我論的基礎の流出」（DI, 409 = 1982:466）とよび、次段落で論述する〈傷ついたコギト〉の性格として把握する。
この精神分析の回帰場所としての意識は、当然フロイトが批判した直接意識ではない。その意識は、無意識と隔絶した意識ではなく、無意識と相対的な意識、つまりは無意識と弁証法的関係にある意識である。フロイトが意識と無意識の連続性を強調したこと、そして、〈代表〉の機能が、無意識と意識の共通の構造を保証していたことが、ここで想起されるだろう。リクールによれば、「任意の意識が無意識を〈もつ〉のは、解釈学の規則に対して、また他者に対してである。しかしこの関係は、〈自分のもの〉として無意識を〈もつ〉この意識を放棄することによってのみ現れてくる」（DI, 424=1982:483）。〈自分のもの〉として無意識を〈もつ〉意識とは、〈意味〉の中心が自分自身にある直接意識のことである。直接意識を放棄することにより、解釈学の規則に対して、また他者に対して無意識を〈もつ〉のが、解釈学的意識なのである。この直接意識から解釈学的意識への転化は、リクールによれば、「直接「意識の放棄の結果」としての「新たな質の意識への向上」であり、「その恩恵である」（DI, 419=1982:477）。

リクールは、精神分析の目指すところは「意識を拡大すること」であるという。今までの考察を踏まえれば、ここで意識を拡大する仕事に当たるのは、解釈の規則にもとづいて、他者の意識を介して、無意識にある〈意味〉を意識化する解釈学的意識であることが理解されよう。以上のようなことを踏まえ、リクールは次のようにいうのである。「フロイトが意図するのほ、被分析者が自分にとって無縁であった〈意味〉を自分のものとすることによって、かねて自身の意識野を拡大し、よりよく生き、そしてついては、もう少し自由になり、できるなら、もう少し幸福になることである」（DI, 43=1982:40）。

以上の論述をまとめて、解釈学的意識は次のようにある。第一にその意識は、〈代表〉の機能により無意識との同質性を保証された、無意識との連続性をもつ意識である。第二にそれは、直接意識批判により〈意味〉の膚化が行なわれ、そのものとしての無意識を放棄することによる恩恵として、いかえれば直接意識からの分離による新たな質の意識への向上としてもたらされる。そして最も重要なのは、第三に解釈学的意識は、解釈の規則にもとづいて、他者の意識を介して、無意識を意識化していくことにより、意識を拡大することを目指す意識である。そしてそれこそがフロイトの意図したことであり、解釈学的意識は自分のよろしく知ることを通じて、よりよく生きることを志向することである。

以上のように導き出された、フロイト思想に含まれる直接意識から解釈学的意識への転化は、本稿における無意識概念の検討を経由することで、見通しが可能になったものである。

5. 結語

本稿は、現代に到るまで私たちの人間視に大きな影響を与え続けているフロイトの無意識の特徴を明らかにするために、フロイトの第一局所論における無意識概念を、特にフロイトの叙述のしかたに着目して検討した。その結果として明らかになったのは、フロイトの無意識概念は、非記述的な立場かつつ、力動論、局所論、経済論にもとづいて叙述されるということである。フロイトの無意識とは、自由によって抑圧されることにより、意識とは区別される心的な系である。無意識の内実は、〈力〉としての欲動のエネルギーであると同時に、〈意味〉としての表象の絡状組織でもある。こうした無意識における〈力〉と〈意味〉の一致を可能にするのが、欲動の〈代表〉の機能であった。
フロイト精神分析（第一局所論）における「無意識」概念の検討

このように構築された無意識の絶対的な実在性をフロイトが主張するのに対して、本稿はリクールのフロイト解釈を参照し、フロイトの無意識は経験的かつ構成的実在であることを示した。フロイトの無意識は、欲動の心的代表から派生する表象を通して理解可能な実在論である。なおかつそれは、フロイトのメタサイコロジーによって定式化された解釈の規則にもとづいて、また無意識を解釈する他者の意識を介して構成されるのである。

以上のよう無意識概念の検討を通じて、本稿はフロイト精神分析における意識概念の変容を、直接意識から解釈学的意識への転化として示した。フロイトは無意識の実在を承認させることによって、私たちの直接意識を放棄させる。しかし直接意識を放棄することによって、意識はその質を向上させ、解釈学的意識へと転化する。私たちは（意味）の発生の場としての無意識を、メタサイコロジーにもとづいて、他者の意識を介して意識化することによって、私たちが失った自身の（意味）を、欲動を再び獲得するのである。このような（意味）の離脱から再開へと向かう動きを体験する概念こそが、「欲動の心的代表」である。ここに見出されるのが、「意識的になること」という精神分析の潜在的な目的論である。

フロイトの無意識概念の検討にあたって、本稿はメタサイコロジー的に記述される第一局所論における無意識に焦点を絞ったが、「フロイトの無意識」が現代においても保持している思想的影響力の一部を明らかにすることができたといえよう。「フロイトの無意識」は絶対的な実在性を主張することはできないが、一定の条件付きのもとでは私たちにその実在性を承認させる力を持っている。そしてフロイトの無意識概念の構築作業を通すことによって、本稿は人間理解において「無意識」なるものを視点として採用する際の注意点を示すことができた。「無意識」という概念は、記述的な用法としての「無意識」（＝潜在的な意識）を実体的に転化することで、無限に多様な外延を獲得することができる。人間理解において得るものが多い概念であるからこそ、私たちは私たち自身が、あるいはその主張者が語る「無意識」の内実に注意を向け、その「無意識」概念がもつ意味の外延を認識することが重要であろう。

最後に今後の検討課題を示そう。リクールは精神分析における主体を、直接意識としての〈いつわりのコギト（le faux Cogito）〉から、自己愛への傷あとを受け止めた〈傷つきたコギト〉へという目的論として描出する。本稿で示したフロイトの無意識と直接意識、および解釈学的意識と、フロイト解釈におけるリクールのコギト論との連関を問うことを、今後の検討課題としたい。

6. 謝辞

本研究は、一部、京都大学研究連携基盤未来創成学国際研究ユニットによる研究助成に基づいて執筆された。

7. 参考文献

[フロイトへの文献]
※フロイトの文献からの引用は、以下の省略記号（版、巻：頁）を用いて引用箇所を示す。
Journal of Integrated Creative Studies


全: 新宮一成・鷲田清一他訳『フロイト全集（全二二巻）』岩波書店、二〇〇六・二〇一二。
一 Studien über Hysterie. In Bd. 1, S. 75-312. (フロイト・ヨセフ・ブレーリー)・フロイト（1895）『ヒステリー研究』芝伸太郎訳、全、二所収、岩波書店）。
一 Die Traumdeutung. In Bd. 2/3. (フロイト（1900）『夢解釈』新宮一成訳、全、四／五所収、岩波書店）。
一 Zur Psychopathologie des Alltagslebens. In Bd. 4. (フロイト（1901）『日常生活の精神病理学にむけて』高田清雄訳、全、七所収、岩波書店）。
一 Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. In Bd. 5, S. 27-145. (フロイト（1905）『性理論のための三篇』渡邉俊之訳、全、六所収、岩波書店）。
一 Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia paranoids). In Bd. 8, S. 240-320. （フロイト（1911）『自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的研究』シュレーベー）」渡辺哲夫訳、全、二一所収、岩波書店）。
一 Einige Bemerkungen über den Begriff des Unbewußten in der Psychoanalyse. In Bd. 8, S. 429-439. （フロイト（1913）「精神分析における無意識概念についての若干の見解」須藤訓任訳、全、一一所収、岩波書店）。
一 Triebe und Triebchicksale. In Bd. 10, S. 209-232. (フロイト（1915）「欲動と欲動運命」新宮一成訳、全、一一所収、岩波書店）。
一 Die Verdrängung. In Bd. 10, S. 247-261. （フロイト（1915）「抑圧」新宮一成訳、全、一一所収、岩波書店）。
一 Das Unbewußte. In Bd. 10, S. 263-303. （フロイト（1915）「無意識」新宮一成訳、全、一一所収、岩波書店）。
一 Jenseits des Lustprinzips. In Bd. 13, S. 1-69. （フロイト（1920）「快原理の彼岸」須藤訓任訳、全、一一所収、岩波書店）。
一 Das Ich und das Es. In Bd. 13, S. 235-289. （フロイト（1923）『自我とエス』道篤泰三訳、全、八所収、岩波書店）。

[その他の外国語文献]
Eysenck, H. J., Decline and Fall of the Freudian Empire, Viking, United Kingdom, 1985 (H・J・アイゼンク、『精神分析に別れを告げよう』、宮内勝・中野明德訳、批評社、1998)

[邦語文献]
池田清「リクールにおける無意識概念の検討——フロイトの（力）と（意味）の混合言語の分析——」、待兼山論叢 哲学篇 18、1-16、1985
香山リカ、「スピリチュアルにハマる人、ハマらない人」、幻冬舎、2006
久米博、「フロイトの哲学的解釈」『象徴の解釈学——リクール哲学の構成と展開——』、108-135、新曜社、1978

桜井一成、「リクールの精神分析論——自己理解の解釈学の展開における因果性と客観性——」、美学藝術学研究 32、19-72、2014

兵頭晶子、『精神病の日本近代』、青弓社、2008

堀江宗正、『歴史のなかの宗教心理学——その思想形成と布図——』、岩波書店、2009